政宗騎馬像余話

小室 達・日記から

▷13完

「願いかなえたい」

「戦後はほとんど知られることがなかった。彫刻なんか売れるはずもなく、食うにも困っていたようです。世の中が落ち着いて、芸術に目が向き始めたころには亡くなられた、本当に不遇な晩年でした」

郷土の先輩・小室達を〝再発見〟した柴田町槻木小の後藤彰三校長(74)は、こう言って小室の早過ぎた死を惜しんだ。今年三月、百二歳の天寿を全うした北村西望氏ほど望めずとも、せめて今日の平均寿命ぐらいまで生きていれば、戦後日本の彫刻界を背負う一人になれたであろう。

「デビューは華々しく、昭和十年代には彫刻家として名を成し、県下の名望家の胸像などをたくさん作っている。戦後はそういうものがなくなった。創作活動は昭和十年の騎馬像が頂点だったのではないでしょうか」と、後藤校長は話している。

小室の才能、人となりを知るにつけ、その早世が悔やまれるが、騎馬像のほかにも多くの作品が残されたことは不幸中の幸いだった。小室の制作メモを調べた後藤校長によると、作品の数は八十二点。ほとんどが銅像だったので、戦時中の金属回収で溶かされてしまったが、郷土の小、中学校に寄贈した石こう像や木像などは今も大切に保存されている。

遺作、永久保存へ

が、五十三年六月、思いもかけぬ事故が起きた。柴田町役場ロビーに展示してあった石こう像「遥(はるか)なる愁」が宮城県沖地震で倒れて粉々になってしまったのである。柴田町公民館の騎馬像原型にもひびが入った。ブロンズならば、かつて小室が騎馬像を鋳造する際に願ったように「千年」の歳月にも耐えるかもしれない。石こうや木像では、天災に遭ったら、永遠に失われてしまう。

そこで、町は六十年度から町内にある石こう像十数点を数年掛かりでブロンズ化し、永久保存することにした。

「遥かなる愁は、もう写真でしか見られないんです。天災がなくても、石こうの耐用年数がどのぐらいあるのか分からない。騎馬像(原型)は修復してもらいましたが、中の針金の腐食も考えられます。あのままの形で持つかどうか。騎馬像もブロンズ化したいのですが、金が相当かかるのでちょっとどうなるか」

町教委の担当者は、予算との絡みを示唆しながらこう説明した。

この作品を将来建設する歴史民俗資料館の〝目玉〟に据えたい―という構想もある。資料館の建設は、緊縮財政のあおりを受けて延び延びになっているが、六十五年以降に着工されることになりそうだ。

小室の長男・穣嗣さん(74)は「父の作品のブロンズ化はすごくありがたいことだと思っています。われわれの力ではちょっとできませんから…。もう家には小品しかありませんが、家に置いていても地震とか火事でいつ失われるかもしれない。父の古里に資料館ができたら寄贈したい」と語っている。騎馬像が完成した年に生まれた穣嗣さんは今も、父親の思い出がともる東京都杉並区水福の自宅にさほど手を加えず暮らしている。その横顔は、写真で見る小室の姿情とうり二つだった。

父親の思い出を語る小室穣嗣さん。柴田町が進めている作品のブロンズ化に感謝し、「作品や遺品を寄贈したい」と語っている

小室達の主な作品

▷想（大正11年、県議会議事堂）
▷しな（同12年、柴田町柴田小）
▷構想（同14年、県美術館、柴田町槻木小、槻木中）
▷伊達政宗騎馬像（昭和10年、仙台市・仙台城跡、柴田町公民館）
▷女武者木像２体(同14年、白石市・斎川甲冑堂)
▷その他、題不明の少女裸像、裸婦像などが柴田町船岡小、船岡中、白石高、白石市図書館などにある。県内の名望家の胸像や林子平、ショパン、ペスタロッチらの像も多い。

みやぎ路

河北新報　昭和62年(1987年)5月21日掲載